

の大工の棟梁にかつて訊ねてみたら、その銭湯の土地の高いやすい方を女性に、またのぞかれ判断して決めるといふことがわかった。

ケロリン桶

昭和38年に登場した樹脂製の桶。当初は白色であったが、汚れが目立つところから、すぐに黄色となる。ケロリンの文字は特殊な技法として樹脂の中に浸み込ませてあるので、退色することはない。ケロリンとは、現在でも全国の薬局にて販売されている、富山の薬



品メーカー内外薬品(株)により製造されている鎮痛剤の商品名である。現在でも全国に約200万個ほどが出回っているという。

マッサージ器

昭和30年代に入り、それまで浴室にて、背中を流してマッサージをして^{さんすけ}くれた三助さんが姿を消すころ、それに代わって脱衣場に、自動マッサージ器が登場した。コイン式の椅子型のもので、脇の丸いハンドルにて上下できるといふすぐれものもあり、現在でも全国の銭湯脱衣場においての、定番のアイテムとなっている。

下足箱

銭湯に来てまず利用するのが下足箱である。もつとも常連客の中にはそのまま上がり利用しないこともある。下足

箱には鍵がある。木や金属の四角いものだが、これも人気のある番号から使用される。私の子供時代はなんといつても3番、1番だった。昨今は55番とか、サッカー選手の背番号などいろいろある。

のれん

銭湯ののれんもかつては銭湯の屋号を染め抜いたものが多かったものの、昭和30年代ころより、石鹸や牛乳などのスポンサー名入りのものが使用されるようになってきた。東京のみ長さが約20cmと短いものが多いのは、玄関と脱衣場が独立したスペースのため、通りから脱衣場が見えないためで、他の地域は入口を開けるとすぐに脱衣場という構造の多いことから長さが約1m近くという目隠しの目的をもつ長いのれんとなっている。



番台

番台とはその文字のごとく、番をする台のことである。番台での仕事は浴室の安全確認や、板の間稼ぎ（他人の金品を盗む）の監視や、お客さんとのコミュニケーションという重要な役割もある。私の調査では東京の番台の高さが平均1m30cmと日本一高かった。これは常連客が少なかったのと、浴室が広いために必然的に安全確保のため高くなったと思われる。

浴室の絵

銭湯という浴室にある富士山のペンキ絵や鯉のタイル絵などが有名であるが、これも東京型銭湯の特徴といってもよい。したがってその他の地域におけるとくに富士山等のペンキ絵は極めて少なくなる。これはペンキ絵の発祥が



大正元年の東京であり、地方にまで広まってはいるものの、現在ではその絵を描く職人も現役では東京に3名のみとなっていることにもよる。

脱衣かご

脱衣場において、脱いだ服などを入れるかごである。関西型と呼ばれる四角いものと、関東型と呼ばれる丸い型

の二種類がある。特に京都に四角いものが集中しており、中には竹で編んだものの側面に氏名を入れているものを使用している銭湯も現存する。最近ではロッカーが主流となっているので、これらは姿を消しつつあるのが現状といえる。

男女の向き

銭湯における男女の向きはいったいどのようなように決められるのか、という質問は実に多い。一説にはおひな様の向きと同じ、という説もあるが、これとて、江戸と明治では異なるので違う。銭湯専門

『銭湯の断片』

第1回 観察

文／町田忍

